



連載第 127 回

「アニマルウェルフェア畜産」の今 (その1)

ストレスの少ない環境で病原菌に対する免疫力を高めた家畜は、健康的でおいしい畜産物を消費者に提供してくれる。近年、世界的にアニマルウェルフェア(家畜福祉)になった畜産が急速に進展している。しかし日本では、家畜福祉の概念や基準、他国の状況を学習する機会が少なく、畜産業界や消費者の関心もまだまだ低い。10月中旬、そんな状況を改善しようと、NGOの「農業と動物福祉の研究会」は獣医師を主な対象に、十勝管内で家畜福祉セミナーを開催した。同セミナーや見学会に参加し、アニマルウェルフェアの今をあらためて考えた。



▲乳製品などの販売や飲食コーナーもある十勝しんむら牧場の「クリームテラス」

▲放牧している豚は人懐っこい。カメラを向けると寄ってくる(幕別町内のエルパソ牧場で)

家畜福祉に関心が薄い日本の現状 改善が求められる飼養環境と意識

94年に放牧酪農へ転換 取り戻した「土の健康」

「家畜福祉獣医師研修セミナー」の1環として10月13日、上士幌町内にある(有)十勝しんむら牧場の見学会が開かれた。

紅葉が進む林と草地とのコントラストが美しい風景が広がり、放牧された牛たちが黙々と草を食み、ゆっ

たり歩く。セミナーの参加者はスコップを使って土を掘り、土壌の状態などを観察する。

草地と山林で100ヘクタール余の経営面積があり、乳牛140頭(うち経産牛85頭)を飼養中。放牧地と牛舎の間を牛が自由に行き来できる。生乳を加工し、牛乳や乳製品、ミルクジャムを製造・販売。牧場を見て、飲食ができる「ヨーローム」クリー

ムテラス」も。建物周辺の草はヤギがきれいに食べてくれる……。

創業は1933(昭和8)年、初代が富山県から入植した。酪農の歴史は長く、入植の4年後には乳牛を導入。2代目の故・新村源雄さんは、農民運動で活躍し、社会党の衆院議員も務めた。2000年、4代目の新村浩隆さん(71年生まれ)が法人経営に衣替えした。

くれる草を育てることで、家畜福祉にも配慮した牧場を創った。

「僕はもともと、牛が好きじゃなかった。でも、一生やり続けられて、必要とされる仕事は何か、と考えました。環境を守りながら、健康になれる食品づくりをやっていたら、ずっとできる仕事じゃないか。すると、農業が一番合っていたんです」

と、新村さんは牧場の仕事に就いた理由を語る。
酪農学園大学を卒業し、実家にUターン。そのころは、牛を舎飼いで、搾乳や給餌、糞の掃除まですべて人間がやっていた。

将来、化石燃料がなくなり、輸入穀物が安定的に手に入らなくなる。そんなリスクを負わないように、94年には放牧酪農に転換する。放牧すると牛に喜んでもらえると思っただけ、実際には草地を一周して牛舎に戻り、「餌をくれ!」とばかりに鳴きわめく。ひとつの糞を囲む直径1mほどの牧草は食べてくれない。夏になると、草が徒長して牛がどこにいるか分からず、草地には糞尿特有の臭いが漂う……。

土や草の健康が損なわれ、牛の胃や腸に棲息する微生物の働きが悪く

同牧場が考えるアニマルウェルフェア(家畜福祉)の考え方は、
[1]放牧することによって、牛を牛らしく飼育する

[2]環境や働く人に負荷をかけない
[3]免疫力の高い健康な牛からおいしい牛乳を

[4]飲む人の健康にも寄与する
というもの。土の健康を取り戻す実践を積み重ね、牛が喜んで食べて

なっていたのだ。そこで、土壌分析をして、草地に必要な肥料を配合して散布し、土の健康を取り戻していく。3〜5年たつと、牛たちは放牧地全体を歩くようになった。

見学時には、糞のまわりの草はきれいに食べられていた。「草丈も長短あり牛の選択肢が広がった。(はびこると厄介な)ダイオウが生えない土壌になり、(タンパク質が豊富な)クローバーなどが増えてきた」と、新村さんが説明する。

セミナーでは、今年1〜8月の病傷事故件数が紹介された。しんむら牧場は、乳房炎や乳熱、繁殖障害など28件。町内68戸の平均は56件だから、半分にとどまった。牛たちの健康度が高いことがよく分かる。

経営のバランスをとって みんなが幸せになる牧場を

放牧酪農が軌道に乗るなかで、新村さんは牛乳を直接、お客さんに飲んでもらい、販売も自分の責任でやりたい、と考えた。

15年ほど前、ある外食産業の経営者から、「今さらバターやチーズを造っても将来性がない。バターを使ってケーキをつくり、加工度を上



放牧によって牛を牛らしく飼育し、健康な牛からおいしい牛乳を生産・加工・販売する「アニマルウェルフェア酪農」を進める十勝しんむら牧場。健康な土をつくるために努力を重ねてきた



飲食店を営む傍ら、毎日のように牧場へ通う平林英明さん

類を往復する日々が続く。
70年代初め、国際農友会の研修生としてアメリカに渡り、放牧養豚や豚肉の加工などを学ぶ。帰国後は飲食店を開業し、米国での経験を生かして自家製のソーセージやベーコン、ハムなどの製造を手がけてきた。地ビールの製造・販売もやっている。
レストランや加工部門が充実するなかで、念願の放牧養豚をスタート。初めは生後3カ月余りの子豚を購入し、帯広市内にあるかつての馬の放牧場に放した。そこで育った豚を屠場に送り、豚肉を捌いてハムやソーセージに加工。自分の店で料理として提供する一方、精肉や加工品を販売している。

「泥だらけになりながら育つ豚だから、「どろぶた」と命名。店のホームページで、豚のそばで寝そべる平林さんの姿を見ることが出来る。「豚の習性として、泥んこになるのを好む。コンクリートの豚舎で暮らすのは、迷惑なことなんだよ」と、力を込める。
移設先の旧忠類村の牧場は、広さが35ヘクタール。小高い山が4つある。町から土地を借り、今は500頭ほどを放牧している。
豚たちは、斜面を上り下り、土を掘り、草や植物の根を食べ、気が向くと昼寝をしたり…。人間の姿を見ると、すり寄ってくる。かわいいものだ。一緒に訪れた宮城や東京で養

と、志を同じくする人たちと構想を練っている。実現できる日はそう遠くないようだ。
■農業と動物福祉の研究会
武蔵野市境南町1-7-1
日本獣医生命科学大学 食料自然共生経済学教室(永松美希事務局長)
<http://www.jfawi.org/>
■(有)十勝しんむら牧場

上士幌町字上音更西1-261
Tel 01564・2・3923
Fax 01564・2・3919
<http://www.milkjam.net/>
■(有)北海道ホーブランド
幕別町相川143番地
Tel 0155・54・5477
Fax 0155・54・5432
<http://www.hopeland.jp/>
■(有)フンチョ・エルパソ(株)マノス
帯広市西16条南6丁目13-20
Tel 0155・34・3493
Fax 0155・34・3494
<http://www.elpaso.co.jp/>



エルパソ牧場の豚たちは、山の斜面を昇り降りしながら育つ



「アニマルウェルフェア商品認証の仕組みが必要」と力説する妹尾英美さん

ア の概念や基準、国内外の状況などを学ぶ場が今回のセミナーだった。終了後、松木代表やアニマルウェルフェア畜産に取り組む人たちと、十勝管内で放牧養豚を手がける2軒の農場を見学した。
幕別町の農業生産法人「(有)北海道ホーブランド」(妹尾英美代表取締役)は、7年前から放牧養豚を始め、今では約300頭を飼育する。
放牧の目的は、豚の糞尿を還元するなかで、畑作の輪作体系に養豚を組みこむこと。若いころから有畜農業に関心があった代表の妹尾さん(1944年生まれ)は、10年ほど前にイギリスの放牧養豚場を訪れ、この飼育方式に手応えを感じた。

ホーブランドでは、鹿追農協から子豚を購入し、生後2カ月から放牧を始める。アニマルウェルフェアの農場だから、一般の養豚場で行なわれる、断尾や個体識別のために耳を切る「耳刻」はしない。10月ころになるとトウモロコシなどの購入飼料やカボチャを与えて皮下脂肪を蓄積させ、真冬も放牧する。
十勝川の河川敷と自社農場で飼育する計画だが、畑作専門なので畜産専従のスタッフを雇える収入がないのが悩みのタネのようだ。今はまだ輪作体系のなかに位置づける計画は実現していない。
ブランド名は「えぞ豚」。主に東京のレストランに向けて、1頭8万円

ほどで販売してきた。「長く飼育しないと取引先は納得しません。『脂身の味が他の豚と全く違う』と、多くのシェフが評価してくれそうですね(妹尾さん)」。
一般の養豚場は、生後6〜7カ月、体重110キロ程度で出荷するところが多い。一方、ホーブランドの豚は、最低でも1年半じっくり育て、平均体重200キロで出荷する。
妹尾さんは、「アニマルウェルフェアは食べる人の心だと思う」と力を込める。
昨年、農場が受け入れた東欧の研修生から、「向こうでは、アニマルウェルフェアを取り入れた家畜の飼育は、経営が楽ですよ」と言われた。しかし、日本では生産者に対する直接支払いがないと、経営は難しいのが実態だという。
「消費者の間に健康志向が強まっているけれど、果たして『緑の政策』のなかで生産されたEUの畜産品の輸入を食い止めることができるのだろうか。国は、アニマルウェルフェア商品認証する仕組みを創る必要がある。なぜ欧州諸国が統合してEUが誕生したのか、研究者や政府はよく考えてほしい」

と、妹尾さんが注文を付ける。それは、アニマルウェルフェア商品を広げるための大きな課題だ。

飲食店が営む山の養豚場で販売戦略などの課題も展望

帯広市内でレストラン「ランチョ・エルパソ」を営む平林英明さん(1945年、同市生まれ)は、放牧養豚を始めて8年になる。最近、幕別町忠類地区にある公共牧場の跡地を借り、新しい放牧養豚場をオープン。トラックを運転し、帯広と忠



幕別町内の公共牧場跡地を借り、今年オープンしたエルパソ牧場